

高大連携を通じた探求学習の課題と可能性

Challenges and Possibilities in Inquiry Learning
through High School-University Collaboration

石川 敬之

北九州市立大学 地域創生学群
『地域創生学研究』 第6号 2023年3月

高大連携を通じた探求学習の課題と可能性

Challenges and Possibilities in Inquiry Learning through High School-University Collaboration

石川 敬之*

Takayuki ISHIKAWA

<要旨>

「総合的な探究の時間」にて実施される探求学習への期待は大きいですが、その実施には課題も多く存在する。一方、高大連携は探求学習を進めるうえで有利性を持ち、参加する高校生に新たな学びの機会と経験を与えるだけでなく、教える側に立つ大学生にとっても貴重な経験と学びをもたらす。さらにそれは高校の教員にとっても同様である。本稿では高大連携を通じて実施した4ヶ月間の探究学習において、高校生と大学生、また高校教員が経験した学びと成果を確認する。また、その可能性と課題についても検討する。

<キーワード>

「総合的な探究の時間」、探求学習、高大連携、ジェンダー問題

1. はじめに

高等学校では2022年から「総合的な探究の時間」が新たに導入された。そこではその名のとおり「探究」が重視され、生徒の主体的・自発的な学びが求められた。探求学習をめぐってはその高い学習効果に期待がなされているが(藤原、2020)、実際の現場ではどのように授業として進めていくべきか試行錯誤が続いている。とりわけ、普段の授業に加えて「総合的な探究の時間」の授業担当になった高校の教員は、どのように生徒を指導し、またどのような学びを得てもらうのかについて苦慮している。本稿の目的は、こうした「総合的な探究の時間」および探求学習に対して、高大連携がどのような可能性を持つのかを検討するものである。今回、筆者が取り組んだ高大連携による探求学習の事例をもとに、参加した生徒や学生、また教員の気づきや学びをそれぞれの証言やアンケートデータなどを通じて検討していく。また、高大連携を通じた探究学習を進めるうえでの課題や

* 北九州市立大学地域共生教育センター

その解決に必要な要因、そして今後の可能性についても考えていく。

本稿の構成は以下の通りである。まずは高等学校における「総合的な探求の時間」の課題について確認する。その後、今回筆者が取り組んだ高大連携を通じた探求学習の事例を紹介する。ここでは探求学習に対する高校生のコミットメントを高める仕組み、またその成果などについて詳しく述べる。最後に高大連携を通じた探求学習の可能性と課題について考察する。

2. 「総合的な探究の時間」と探求学習

2.1 「総合的な探究の時間」と探求学習の課題

現在、日本の多くの高等学校において探究学習が進められている。探求学習とは「自ら課題を設定し、その解決に向けて情報を収集して分析を加え、新たな気づきや発見をまとめ、表現する」ことを発展的に繰り返していく学習活動であると定められており、2015年に導入された「総合的な探究の時間」の授業の中で実施されることが多くなっている(文部科学省、2019)。「総合的な探究の時間」(以下、「総探」)は2003年に正式に導入された「総合的な学習の時間」を展開させたものであり、「総合的な学習の時間」と同じく「教科・科目等の枠を超えた横断的・総合的な学習」が目指されるとともに、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学び」を展開するものとなっている。いわば、自分自身が生きていくうえで重要になると考えられる課題を発見し、その解決への取り組みを通じて生きる力や社会で求められる力を養うことを目的にしているのである。

ただ、「総探」の授業の中で探究学習が取り入れられたとしても、生徒が自らの生き方や在り方について考えていく力を身につけていくことはそう簡単ではない。現場では担当する教員が指導方法を検討したり、また研修会に参加したりするなどして生徒の探究的な学びをサポートしようとしているが、いまだ多くの課題が存在している。実際、探究活動を担当する高校教員を対象とした調査によれば、探究学習を実施するうえで最も必要とするものは「学生による生徒への学習サポート」であった¹⁾。確かに生徒が設定するテーマの中には担当教員の専門と直接関係しないものもあり、それらについて調べたり、また専門家に問い合わせたりする時間やネットワークもないため大きな負担になっていることは想像できる。また、この調査では「生徒からの質問に答える方法がわからない」とした教員の存在も明らかになった。高校教員の中には探求学習そのものをどのように進めればよいのかを把握していないケースもあり、探究の意義や主体的に取り組む重要性について伝える難しさもあって教員の計画通りにいかない場合も多いのである。

2.2 本稿の問題意識

本来、その目的や方法が十分に理解された上で実施されると高い教育効果が得られる探

究学習であるが、その探求学習を「総探」で進め、生徒たちの学びを促進させるには、探究学習そのものに精通し、また現場でのサポートを提供してくれる外部との連携が重要になってくると考えられる。そして、その連携相手として考えられるのが大学なのである。では、「総探」での探究学習において高大連携はどうあるべきか。また高大連携を通じて生徒の学びは深まるのか。さらに大学にとってもメリットはあるのだろうか。

こうした問いについて考えるため、以下では筆者が関わることになった高大連携による探究学習の事例を取り上げる。この取り組みでは、大学と高校が連携し、ジェンダー問題をテーマとした4ヶ月にわたる探求学習が実施された。そして、その過程の中で高校生と大学生はそれぞれ新たな経験と学びを得ることができた。もちろんこの事例が高校の探究学習にとって最適解というわけではない。しかし、探究学習の現場に見られる課題に取り組むうえでの重要な示唆が得られたと考えられる。以下では、この高大連携がどのように進み、また高校生と大学生がどのように協同し、そしてどのような成果が得られたのかを記述していく。

3. 事例

3.1 事例の概要

今回取り上げる事例はジェンダー問題をテーマとして実施された探求学習である。本事例にはいくつかの特徴がある。まず、この探求学習は大学生とともに実施されたということである。詳細は以下で述べるが、この探求学習は高校の「総探」の授業として実施され、大学生がファシリテーターとなって高校生の学びをサポートすることになった。高校生1チームに対して2～3名の大学生がつき、具体的な課題設定から情報の収集・整理・分析の方法、また実践活動の指導や最後のプレゼンテーションまで一連の活動をサポートした。今回大学生がサポートしたのは4つの高校の6チームであり、高校生は自ら手を挙げてこのプログラムに参加した。またこのプログラムは4ヶ月継続して実施され、高校生と大学生は「総探」の授業時間だけでなく放課後や休日も一緒になって探求学習を実施した。こうした長期的な関わりが高校生と大学生の活動とその成果にどういった影響を与えたのかも記述していく。さらに、もうひとつの特徴として、この探究学習では社会を変えるための実践活動を行った。単に文献やインターネット上にある情報を集めて終わりではなく、自分たちが取り上げたジェンダー問題の解決に向けて実際に何かしらのアクションを取ってもらうことを求めたのである。高校生の各チームがどのような実践活動を行ったのかについても後述するが、この課題は今回の探究学習の成果に大きな影響を与えることになった。

以上が今回の事例の特徴である。それではまず、この探求学習がどのようなきっかけで開始され、どのように進んでいったのかを説明する。

3.2 探究学習実施のきっかけ

今回の探求学習では、高校4校から29名の生徒、また筆者が所属する北九州市立大学から大学生13名が参加した。この取り組みが始まったきっかけは、男女共同参画の推進に取り組む公益財団法人（以下、Mセンター）から筆者が所属する北九州市立大学地域共生教育センターに相談があったことによる。Mセンターは前年度に発行した啓発冊子をより多くの若者に手に取ってもらいたいと望むとともに、ジェンダー問題についても自分ごととして考えてもらえるような取り組みを実施したいと考えていた。ただ、Mセンターとして具体的な内容が固まっているわけではなく、できれば内外の様々なリソースを活用し、最も効果的な形で事業を進めていきたいと考えていた。当日相談を受けた筆者も、単に冊子を配ったり、著名人による講演や模擬授業をしたりするだけでは効果がないだろうと感じていた。そうではなく、若者がジェンダー問題に興味を持ち、より積極的に活動に取り組んでいくためには、そうした受動的な形式ではなく、若者が自らジェンダー問題に取り組んでいけるような場をつくることが重要でないかと考えていた。Mセンターの担当課長もそのように考えておられ、ジェンダー問題に関心のある若者と一緒に活動し、若者の意見を聞きながら形にしていくことを望まれていた。そうしたこともあって、当日の会議では、筆者が所属する地域共生教育センターに関わっている大学生と市内の高校生が一緒になってジェンダー問題を考える探求学習の実施を目指すことが確認された。ちなみに、地域共生教育センターというのは北九州市立大学生の地域貢献活動をサポートする学内組織である。

3.3 既存ネットワークを通じた参加呼びかけ

では実際に、若者がジェンダー問題を自分ごととして捉え、より積極的に課題解決に向けて探究学習をしていくにはどうすればよいのか。実施したい活動の方向性は定まったが、それを具体的に進めていくことは容易ではなかった。まず、ジェンダー問題に関心をもつ参加者をいかに集めるのかということが問題となった。今回我々はより多くの若者にジェンダー問題について考えてもらいたかったため、できれば複数の高校から参加者を募りたいと考えていた。そのため筆者とMセンターは、それまで一緒に活動したことのある高校へ声がけをすることから始め、筆者が県立H高校、Mセンターが市内の私立高校に参加の呼びかけを行った。筆者はSDGsをテーマとした大学生による模擬授業を市内のH高校と実施したことがあり、その後もH高校との関係が保たれていたため今回の件をH高校のY教員に連絡した。すると、ちょうどY教員も「総探」の担当となっており、その進め方について検討していたところであった。そのため、今回、大学と一緒に取り組めることは良い機会だったわけであり、他の「総探」担当の教員と共に協力してくれることになった。またY教員は他の高校へも呼びかけを行ってくれた。今回、我々は高校生の意見の違いや特徴が出るよう、公立校、私立高、女子校、そして高等専門学校が参加してくれることを望んでいた。そのためY教員は繋がりのある各高校に声がけをしてくれた。

その結果、それぞれから1校ずつ、全員で29名の生徒が参加してくれることになり、それぞれの立場からジェンダー問題について探求し、共有することができるようになったのである²⁾。

3.4 高校生の参加動機

高校の先生方の協力もあって多くの高校生が参加してくれることになったわけであるが、ここで高校生たちがこの探究学習に参加した動機について確認しておきたい。今回多くの高校生が参加してくれたが、それでも参加した高校において、先生の呼びかけに反応した生徒は一握りである。では、そうした高校生はなぜ今回の探求学習に参加したいと申し出てくれたのか。

高校生に対して実施したアンケートからその参加動機について確認すると、上位から「ジェンダー問題に関心があるから(11名)」、「先生に紹介されたから(7名)」、「探究学習に興味があるから(6名)」となり、そのあとに「今回の企画が面白そうだから(4名)」、「大学生と交流できるから(3名)」という回答が続いた。ここでは、「なぜ先生の紹介に反応したのか」ということが重要であり、その意味で多くの高校生は今回の企画テーマと実施方法に興味をもっていたということがわかる。つまり、高大連携は教員だけではなく高校生自身にとっても魅力的なものであることがここから見て取れるのである。

また今回は高校生に性格の主要5因子を測るテストも受けてもらい、そのうち探究学習への参加に関連すると考えられる、外向性、協調性、開放性のスコアを調査した。測定はTen-Item Personality Inventory (TIPI)を使用した。TIPIはGosling, Rentfrow, & Swann (2003)が開発したビッグファイブ理論に基づく性格を10項目で測定するものである。小塩他(2012)により日本語版(TIPI-J)が開発されており、その信頼性・妥当性の検証も行われている(並川他、2012)。今回は5件法を採用し、高校生の各性格特性を測定した。その結果、今回参加してくれた高校生の外向性、協調性、開放性の平均スコアは、外向性が3.39、協調性3.59、開放性2.98となった(5点満点、サンプルサイズN=26)。性格スコアは正規分布すると考えられているので今回の探究学習に参加した高校生は一定以上、外向性、協調性、開放性を持つと考えられる。

さらに今回は探究学習への自発的参加行動と関連が深いと考えられる自尊感情(self-esteem)についても測定を行った。自尊感情・自尊心は自己に対する自信、自分自身への肯定感である(Rosenberg, 1965)。こうした自尊心は今回のような体外的な活動に対しても自発的に参加する動機になりうると考えられている(加藤・斉藤・瀧野、1987; 豊田・松本、2004)。したがって今回はローゼンバーグ自尊感情尺度(Rosenberg's Self Esteem Scale: RSES)の10項目を5件法によって測定した。その結果、探究学習に参加した高校生の自尊感情の平均スコアは2.92となった。この値は内田・上埜(2010)が健常大学生329人(男性:女性=185:144、年齢=20.84±1.56歳)を対象とした調査の平均値である2.51と比べても高くなっており、年齢の違いはあるが今回の探究学習に参加した高校生は

相対的に高い自尊感情を持っているということが出来る。以上のことから、探究学習に関心を持つ高校生は高い好奇心と開放性を持ち、自分自身にも自信を持っていることがわかる。そして、こうした性格や能力が後述する大学生と一緒に進める探究学習の実践と成果にも関連していたと考えられるのである。

3.5 大学生の参加動機

一方、もうひとりの主役である大学生の参加についても説明しておく。今回、このプロジェクトに参加してくれた大学生は筆者が個人的に声をかけたことで集まってくれた学生たちである。筆者が所属している地域共生教育センターで地域活動を行っている学生や、同センターが所管している副専攻プログラムを履修している学生、また個人的に知っている学生たちであり、それぞれ探求学習やジェンダー問題に関心を持っていた。また参加してくれた学生のほとんどは正課の授業としてではなく自主活動として参加してくれた³⁾。つまり大学生も今回の探究学習に対して高い関心と意欲を持って参加してくれたのである。では、このような高校生と大学生が実際にどのような探求学習を進めていったのか。また、そこでどのような取り組みがなされ、どのような学びが得られたのか。以下、具体的に説明していくことにする。

3.6 探求学習の開始

高校生と大学生の初対面は、筆者と M センターが最初の打ち合わせをした日から数えておよそ 2 ヶ月後の 2022 年 7 月 16 日であった。この日は高校生と大学生による探求学習のキックオフイベントとして LEGO 社のレゴブロック（以下、レゴブロック）を用いたワークショップを開催した。専門のインストラクターを招き、レゴブロックを用いてジェンダー問題に考えるというワークショップであった。このとき大学生には、各高校生の雰囲気、またワークショップを通じて見えてきた高校生の関心テーマの把握、さらにできれば今後の活動につながる関係性をつくってもらうようお願いをしていた。結果として、高校生と大学生は初対面にもかかわらず打ち解け合い、ワークショップが終わっても仲良く話す光景が多く見られた。また、このワークショップは高校の先生にとっても興味深いものであったらしく、会場に来られていた先生からは後日次のようなコメントを頂いた。

「7月のキックオフイベントのワークショップによって、日常と異なる学びができる生徒は感じたと思います。自分の考えに気づく、それを表現するというスキルは必要なものですが、高校の授業ではそれを主に学ぶことはありません」(H 高校・女性教員)

また当日の現場でも「このような学びの方法があるのですね」といった感想を複数の先生から伺うことができ、高校生が楽しそうにワークに取り組んでいる様子を新鮮に見ておられた。

このキックオフイベントとしてのワークショップが終わると、ジェンダー問題をテーマとした本格的な探求学習が始まった。もう一度確認しておく、この探求学習では大学生がファシリテーターとなって高校生の学びに伴走し、継続的にサポートすることが行われた。探求学習の結果は「成果発表会」にて発表してもらうことも当初から高校生と大学生に伝えられており、実際、成果発表会が近づいてくると多くのチームで「総探」の授業時間以外にも活動が行われた。そのスケジュール調整には苦勞を要したが、高校の先生方の協力もあって実現することができた。

また、この探究学習は対面とオンラインの両方で行われた。大学生が高校に出向いて通常の授業時間中に活動することもあったし、放課後にオンラインで行うこともあった。各チームの活動回数・活動時間に多少の差はあるが、実質4ヶ月ほどの活動期間の中で10回以上の授業や打ち合わせが行われた。1回の活動時間はおよそ1時間～2時間ほどだった。

3.7 コミットメントを高める仕組み

さらに今回の探求学習では、高校生がジェンダー問題を自分ごととして考えてもらうための工夫をいくつか取り入れた。大学生がファシリテーターとして長期に渡って学びをサポートすること、また学びの成果を発表してもらうことはすでに述べたが、もうひとつ、高校生には「社会を変えるための一歩となるようなアクション」を行ってほしいとお願いした。これは自分たちが取り上げたテーマについて実際に行動してもらうこと、つまり課題解決のために少しでも実践することを求めたものであった。インターネットで情報を集め、その感想を述べて終わりというのではなく、自分たちが探求していることと社会との接点を作ってもらいたいという意図があった。そうすることでジェンダー問題を自分ごととして考えてもらいたかったわけである。そして、この工夫は大学生の努力もあり大きな成果をあげることになった。以下ではそうした高校生たちの探求学習とその成果について、より具体的に報告をしたいと思う。

3.8 探究のテーマと各チームの活動

各高校生チームの探求学習のテーマは以下のものとなった。H高校の3チームは、「身近なアンコンシャス・バイアスについて」、「女性が活躍できる組織と社会」、「LGBTQ+について－多様性を尊重する世の中へ－」となり、M高校の2チームは「LGBTQ+に対する偏見をなくすために」と「すべての人が過ごしやすい環境づくり」、そしてS女子高校は「アンコンシャス・バイアスワークショップ」となった⁴⁾。以上のテーマはジェンダー問題に対する高校生の関心を大学生がヒアリングし、そこからチームとして取り組むべきテーマに絞り込んでいったものである。では、こうして設定されたテーマのもと、高校生と大学生はどのように探求学習を進めていったのか。また今回の探究学習のポイントとなった実践は具体的にどのようなものであったのか。

まず、高校生と大学生は良好な関係をつくりながら学びを進めていった。最初はお互い緊張しがちであったが、回を重ねるごとに打ち解けた様子になったのは現場でも見て取れた。もちろん大学生がうまく意見を聞き出したり、時に雑談を交えたりしながらファシリテートしたことが大きな要因になっていたと言える。ちなみにこうした関係性の構築は、今回の探求学習が4ヶ月間にわたるものであったことが功を奏したと考えられる。これが1回限りのワークショップイベントなどであったりすると、たとえアイスブレイクなどを行ったとしてもお互いに深い議論ができるほどの関係になることは難しいと言える。また一方で、期間が1年を超えるものだったり、明確な区切りがないものであったりすると、かえって緊張感がなくなってしまうこともある。今回の探求学習は4ヶ月間という限定があったからこそ、高校生と大学生の学びに対するモチベーションも維持されたと言える。これは高校生の以下のようなコメントからも確認できる。

「初めて大学生と関わる機会があって初めはとても難しかったけど途中から話し合いながら進めるのがとても楽しかった」(女性活躍チーム・2年生・女性)

「大学生の方々は親しみやすく振る舞ってくれ、そのおかげで議論もよく進み、コミュニケーション能力の高さと、圧倒的な知識の多さで私達の班の探究方針や探究の仕方などの大切な作業をしっかりと私達に教えてくれて、探究活動がたいへんしやすくなりました。」(LGBTQ+ チーム・2年・男性)

「普段はしないような考え方や思いつかない発想をしていて、様々な学びがありました。また、限られた時間の中でスライド・発表までリードしてくれてとても楽しかったです」(女性活躍チーム・2年生・女性)

このような関係性のもと、各チームの探究学習は非常に充実したものになっていったのである。

それでは次に、各チームが取り組んだ実践活動について見ていきたい。今回の探究学習は「調べて終わり」ではなく、社会に対して何かしらの行動を取ることを高校生にお願いしていた。そうすることで探究学習に対するコミットが高まると考えたからであった。そして実際に、この実践活動は高校生と大学生の連携にも、また高校生の学びにも大きな効果を発揮した。ここでは2つのケースを取り上げたいと思う。

3.8.1 M 高校チームによる LGBTQ+ 啓発動画作成への挑戦

まずは LGBTQ+ に関する啓発動画を作成したチームについてである。性的マイノリティに対するアウティング問題に関心を持っていたこのチームは、この問題を同級生や保護者、また成果発表会に来てくれる市民の方にも知ってもらいたいと考えていた。そのた

め大学生は、この問題に関心を持ってもらうために啓発動画を作成してはどうかと高校生に提案した。そして、動画を見てもらったうえで「自分ならどう思うか」、また「自分ならどう行動するか」を考えてもらうようにしたらどうかとアドバイスした。

この提案に興味を持った高校生だったが、一方で動画を作成することに不安もあった。動画のシナリオを考え、自ら主演し、編集して公開するという一連の作業は大変なものである。ましてや今回はシリアスなテーマでもある。しかし、最終的に高校生たちは大学生の提案を受け入れ動画作成に挑戦することになった。おそらく、この決定の背景には大学生の存在があったことが大きかったと言えるだろう。大学生のサポートが得られること、また大学生の期待に応えたいという気持ちが高校生にあったのではないかと考えられる。

その後、高校生たちの動画作成は順調に進み、結果として2本の作品が完成した。それぞれ、すぐ身近で起こる可能性のある学校内でのアウトティング問題について考えてもらう内容であった。高校生はこの動画を学校の授業はもちろんのこと、社会人が参加するワークショップ、また成果発表会でも披露し、さらに動画を見る前と見た後のジェンダー問題に関する認識の変化も調査した。こうした一連の活動は非常に充実したものであり、その成果も素晴らしいものであった。そのためこのチームは、我々との探求学習の終了後、文部科学省が開催する2022年度の全国高校生フォーラムにも学校代表として参加することになったのである。

3.8.2 H 高校チームによる女性経営者との座談会企画

もうひとつのケースは女性が活躍する社会の実現について考えたチームである。こちらのチームでも大学生によるしっかりとしたファシリテートがなされ、比較的早い段階から探求するテーマが決められた。とりわけこのチームでは、担当した大学生が高校生の興味や関心を大切にしたいということで丹念なヒアリングやチーム内での議論が活発になされ、テーマ決めと同時に関連する知識の習得も進んでいった。さらに「女性が活躍できる社会の実現に向けて自分たちができることは何か」ということも早くから議論され、教員との共有もなされていた。そうしたなか、「実際に社会で活躍する女性経営者の話を聞きたい」ということになったため、筆者が仲介するかたちで地元の女性経営者を紹介した。その後は大学生と高校生が協力して女性経営者との連絡や実施しようとした企画(座談会)について説明し、実際に座談会の開催へとつながっていった。協力してくれた2名の女性経営者も高校生の活躍を高く評価し、成果発表会当日も会場まで足を運んでくれた。また高校生と大学生も自分たちの取り組みに達成感のようなものを感じているようであった。それは高校生のコメントからも見て取ることができる。少し長いが引用する。

「大学生にはたくさんのアドバイスをいただいて学ぶことが多かったです。トークセッションで質問する時の言葉選びや質問の仕方などでもたくさんサポートしていただきました」(女性活躍チーム・2年生・女性)

「データを集めるためにトークセッションをして社会で働いている人の声を直接きくことができ、私たち高校（生）の考えとは違う考えをしていた部分がありました。直接取材してみないと分からないこともあることと知り、よい経験になりました。・・・活動の発表のときに同学年の人の前で発表するだけでなく大人の方にも聞かれながら発表したときが一番たいへんでした。失敗したらどうしようなどと不安で心がいっぱいでしたが、大学生のはげましの声のおかげでなんとか発表できました」（括弧内筆者補足）（女性活躍チーム・2年生・女性）

またファシリテートした大学生からも次のようなコメントを得た。

「今回、H高校の女性活躍チームの生徒と活動をしていく中で、信頼関係が日に日に築けたことを実感することができました。同じ目標を持ち、女性活躍という共通のテーマを本気で取り組んでいく過程で年齢に関係なく、お互いを尊重し合える間柄となったからだと思います」（3年生・女性Uさん）

3.8.3 各チームそれぞれの活動

ここまで2つのチームの探究学習について取り上げたが、それぞれ充実した学習が実施されたと言える。では、他のチームはどうであったと言うと、そこでも優れた探究学習が実施された。S女子高のチームは女子校に通う自分たちだからということで、女性の視点からのアンコンシャス・バイアスの問題を取り上げ、学内で同級生を対象にした模擬授業を実施した。また模擬授業を受けてもらうことで女性の役割に関する同級生の認識がどう変化したのかも分析し、その結果を成果発表会で報告した。

アンコンシャス・バイアスというテーマについてはH高校のチームも取り上げた。このチームは自分自身のバイアスを再認識することからはじめ、自分たちからそのバイアスを打破していくための行動を起こすことにした。例えば学校指定の制服（カーディガン）があまり着用されない要因を調べてみたり、自宅で当たり前のようにしてもらっている家事をやってみたりと自分たちができる実践を行った。また、性別関係なく使用できるトイレが学内にないことにも気づき、どのようにすればよいのかを先生と話し合ったり、多目的トイレの呼称やサインなどについても議論を行った。アンコンシャス・バイアスという概念を知ることだけでなく、それについて自分がどのように関わっていけばよいのかということをしっかり考えることを行ったのである。

以上のように、今回の探究学習では多くの高校生、また大学生が充実した活動とそれを通じた学びを得ることができた。高校生たちの活動の様子、また成果発表会の姿を見て、高校の先生方も、またこの企画のきっかけをつくられたMセンターの方々も大変感心されていた。もちろん活動のなかに課題がなかったわけではない。最後は今回の高大連携に

よる探求学習を行う上で確認された課題について取り上げ、今後の「総探」の授業、および探求学習の展開について検討していきたいと思う。

4. 考察

4.1 高大連携を通じた探求学習の課題

「総探」の授業、また探求学習に対する期待は大きいですが、実際の現場ではその実施において様々な課題が存在している。特に、指導する教員の不足や時間的な制約は大きな悩みになっている。そうしたなか、高大連携を通じた探求学習は大学教員や大学生のサポートを得られるという点で有効な手段となりえるが、高大連携を実施しさえすれば探求学習がうまくいくというわけでもない。本稿が今回取り上げた事例でもいくつかの難しい課題が認められた。

まず、高大連携を行ううえでのスケジュール調整の難しさがあった。今回の取り組みで大学生の多くは正課の授業やゼミ活動ではなく自主活動として参加してくれたが、そのため高校生の授業時間に定期的に参加することが難しかった。これは以下のような大学生からのコメントからも確認できる。

「成果発表会というゴールに向かって、高校のスケジュールに合わせて限られた日数と時間の兼ね合いの中で調整していくことが大変でした」(3年生・女性Uさん)

「高校生との連絡が簡単に取れないことが大変でした。オンラインというやりやすい環境であったにも関わらず、高校生と大学生との日程が合わずなかなか話が進まないことを経験しました」(2年生・男性H君)

「正直、活動日を合わせるが一番難しかったです。合わせることができず申し訳なかったです」(3年生・女性Kさん)

それでも大学生は自らのスケジュールを調整したり、オンラインでの指導を行ったりして高校生の学びをサポートしてくれた。その結果、これまで記してきたように高校生の探求学習は充実したものになった。ただ、今回は大学生の献身的な協力があってうまくいったが、いつでもこのようになるとは限らない。またオンラインでの指導に関しても、その利便性を認めながらもやはりその限界はあり、探求学習のような学びでは対面でのコミュニケーションを望む声もあった。

「オンラインの参加が多かったので、コミュニケーションを取るのが大変だった。また、オンラインは一人一人の話を聞くことができず、みんなの意見を話し合ってもらおうこ

とが多かったので、今後気を付けるべきだと思った。・・・自分たちのチームは成果発表会までにオンラインでのミーティング回数の方が多く、物理的にヒトと対面であって話をすると行った行為が好きで自分にとっては少ない回数でどうやって高校生との距離を縮めていくかが難しかったです」(3年生・女性Aさん)

ちなみにこの感想を書いたのは教員志望の学生であった。こうして高大連携とは言え、実際に大学生と高校生と一緒に活動することはそう簡単なことではないことがわかる。オンラインを用いることで柔軟な調整も可能になるが、それでも探究学習のような場合には対面での議論や作業が重要になってくるため、その制約を感じられたようである。ただ、そうであったとしても、これからの高大連携による探求学習はやはり対面とオンラインの両方を取り入れながら進められていくことになるだろう。今回もオンラインによる指導やサポートがあったことで活動が進み、高校生の学びも深まった。どのチームも欠けることなく成果発表会の場に立つことができたのはその証左であると言えるだろう。

では続いて、高校生の活動を見てきた先生方の印象はどうであっただろうか。実は今回の取り組みが終了してから行った先生方へのアンケートからも、やはり探求学習を実施することの難しさが指摘された。つまり、今回は大学および大学生のサポートを受けて実施することができたが、今後自分たちだけで進めていくのは簡単ではないと言うことであった。

「今回、(大学側が)行ってくくださったように、仕掛けがあって、ある程度の方向性を教員が示せば、「総探」の充実がはかれると思います。しかし、指導の方法がわからない、教科指導や学級経営で手一杯で「総探」までは気が回らないというのも現実です」(H高校・男性教員)

「活動期間中は先生、学生さんが高校に出席してご指導くださったので、生徒は労少なく学習できました。参加に多くの努力が必要となると、続かなかったかもしれません。」(H高校・女性教員)

「今回の企画が成功したのもひとえに北九州市立大学のバックアップがあったからだと感じています。学ぶ意欲に火をつけるためには、何かしらの具体的な仕掛けが必要だと改めて感じました。」(H高校・女性教員)

このような探求学習をめぐる課題はこれまでも指摘されていることである。岡本(2019)の調査では、文系科目と呼ばれる教員から「探求学習のイメージが掴めず指導しにくい」という声があることが明らかにされている。これは本稿2.1で取り上げた調査結果とも符合している。今後、高校では探求学習の実施がますます進むと考えられるが、いつも大学

との連携やサポートがあるとは限らない。むしろそのようなケースは少ないだろう。したがって高校教員は、試行錯誤しながらも探求学習のノウハウを学び、また外部とのネットワークも構築していかなければならないと言えるのだが、ただ、闇雲に進む必要もない。今回の取り組みのように、探求学習のなかに実践活動を取り入れることや成果発表会を開催することで探求学習に参加する生徒のコミットを高め、また探求学習の意義を伝えることもできる。またオンラインを効果的に使うことで大学から協力を得る可能性も高まるだろう。一人の高校教員がアンケートのなかで述べていたことであるが、今回のような取り組みをモデルケースとし、これを校内、また他校へと広めていくなかで高校における探求学習が進展していくと言えるのである。

4.2 高大連携を通じた探求学習の課題

以上、本稿では高大連携によって行われた探究学習の事例を通じて、現場での課題とそれへの対応、また今後の可能性について考えてきた。高校生が探究学習を行うためには多くの課題が存在しており、それら全てに高校の教員のみで対応するのは難しかったが、外部との連携、特に大学との連携は現実的な意味での効果を持っていることが明らかになった。大学と連携することで高校側の負担を減らすことができるとともに、高校生にも新たな経験や学びの機会をもたらすことができたのである。さらに高大連携は大学生にとって貴重な学びの場になっていた。事実、今回の取り組みに関わった大学生からは次のようなアンケートに対する回答を得ることができた。

「女性経営者とトークセッションの準備を進めていた際に、生徒一人ひとりがチームの中で主体的に行動し、私たちに質問をしてくる姿を見てチームワークの信頼関係の大切さを体験し学ぶことができました。さらに、活動を通じて、これからの未来を担う高校生たちが、生きがいや夢を持てる社会を私たちが作っていかなければならないと考えるきっかけにもなりました。」(3年生・女性Uさん)

「高校生という立場だからできないかもしれないではなく、難しいかもしれないけれどやってみてほしいと強く感じ、それを言葉にすることが多かった活動でした。私たちが高校生の時も同じように感じていたかもしれませんが、周囲の人たちが学生たちに期待をして、とりあえずやってみる？と一言声をかけるだけでも視野や行動・思考範囲は広がっていくのかなと思います。大学生という大人でもなく、友達でもない関係性の中、本音を聞きだしながらの活動は難しさもありましたが、大学生だからこそその距離感で進めることができたのかなと思います。」(3年生・女性Kさん)

「テーマ決めの際に高校生達は自分がやってみたいと思うとすぐにそちらの意見に流されてしまうことが多かったので、議論を進めるために大学生で大筋を決める工夫をし

ました。この経験から、人をまとめるのはとても大変であることがわかりました。そして、ひとりひとりに合った接し方が存在すると思いました。」(3年生・女性 H さん)

このように高大連携を通じた探求学習では参加する者それぞれが新たな気づきや学びを得ることになった。大学生は教える側に立つことで自らを振り返ることができ、高校生も大学生とのディスカッションや普段出会うことのない人々との関わりを経験し、また動画作成や模擬授業、オープンな場での成果発表会などを通じて新たな学びの機会を得ることができた。さらに高校の教員にとっても「総探」における実務上のサポートを得られたと同時に、今後自らが指導していくうえでのヒントを得ることになった。以上のことは、今回の探求学習に対して高大連携がもたらしたメリットであったと言える。

もちろん、繰り返しになるが、高大連携を行えば探求学習がうまくいくということではない。探求学習においても探求するテーマについての文献をよく読み、その知識を得ることは極めて重要である。「その問いの答えはすでに本の中に書いてあるよ」ということは「総探」の授業においてよく目にする光景である。探求学習において重要なことは、その取り組みに値するテーマを設定することと、それについて適切な学習指導がなされることである。そうすることで高校生は探究することの意義を理解し、知的活動の楽しさを知ることができるのである。確かに高校生に適切な探究学習のテーマを設定させ、「正しい」探究の方法や手続きを教え、さらに主体的・自主的な学びの要素までを取り込むのは至難の業である。しかしながら、まさにその意味において外部と連携が重要となり、高校と大学とが積極的に関わっていくべき理由も見えてくる。それぞれが持てる資源と力を提供し協力し合うことで「総探」における新たな探究学習の展開がなされ、若い世代のさらなる学びの可能性が生まれるのである。

注

- 1) 株式会社トモノカイ (2022) “調査結果リリース 今年度必修の「探究」教員の約5割「生徒の質問に答える時間や人脈ない」” <https://www.tomonokai-corp.com/info/press/2363/> (2023年1月9日閲覧)。
- 2) 具体的には、H高校からは14人、M高校からは10人、S女子高校からは4人、そしてK高校からは1人の参加があった。
- 3) 2名だけ前述の「副専攻プログラム」を履修している学生で、今回の活動を「演習」として実施した。ただ、その2名も単位のためというのではなく、今回のプロジェクトに興味を持ったために参加を希望した。演習では他にも活動オプションがあり、この探求学習に参加していない学生もいることから、その2名が今回の取り組みに関心をもって参加したこと、つまり強制的に参加させられたわけではないことがわかるだろう。
- 4) ちなみに高等専門学校からの参加生徒は1名だったため、H高校のチームに合流する

ことになった。

参考文献

- 藤原さと（2020）「『探求』する学びをつくる」平凡社。
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, 37(6), 504-528.
- 加藤隆勝・斎藤誠一・瀧野揚三（1987）。「青少年の self-esteem 測定の試み『筑波大学心理学研究』9, 73-86.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ・ピノ（2012）「日本語版 TenItem Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』21 (1), 40-52.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口 裕之（2012）。「Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討」『心理学研究』83 (2), 91-99
- 文部科学省（2019）「【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説」学校図書（https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf）2023 年 1 月 9 日閲覧。
- 岡本尚也（2019）「高等学校教育における課題研究の実施に対する課題と可能性」『日本科学教育学会第 43 回年会論文集』, 217-218
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self image*. Princeton University Press.
- 豊田加奈子・松本恒之（2004）「大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』1, 39-54.
- 内田知宏・上埜高志（2010）「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 -Mimura&Griffiths 訳の日本語版を用いて -」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』58 (2), 257-266.

